



門 1 曾 4
號 600
卷 94

待

龍澤文庫

龍澤文庫

新編を龍澤五集の愚評をりさんとせよ東海の全集
唐中の三快を先づ購おきたるまゝよめて只目録をえた
のこむ文に一冊もいまし讀んであはれも撰載を勧
懲り易られしもの大むをを心めて注意めて事々推
量りし御色の傍の奇蹟を感へられと彼此ををてら
して於ふく魏あるの妙を知りしよし一されいとて今
頃よかの三快も讀んくよまてい評をまきなら福と
新編えよりあふらよ東海のことよ憑られしあらはれ
研あるも多うるよ編くの序中よいれてありらよ
此五集の淡路の條を被目録をえし中よはさよと

龍澤文庫

黙許と曰
其事を互に
精細を入
り

おほききもあらば水濟を新録に書きしやうなり
よりてまたんぬ系編に系編としてまの今編うちんる
まのころりてかの例の新録を感しおのるふ
ふしと又いさうかきふれておひゆるしるしふ
二ふしころむる界方のか

○おきん九希の命を母美良父の讒言と知りて謀討するそ
志はおきてハ祐まへきは似れとも禽獸いさ志は人
としていす何はと兇悪邪佞のものでも親の讒言をお
りの意なきものハ有ましく但し身より命よりおの
とおのさるるとして孝子不孝子の差あるべきおまへん

おほきき

おほかくの如し誠意の復讐といふはうらひされハ此節
色ハ復讐を各ましあらて一家親族彼此讒言歌のより
つとへる悪因縁を各ましあるゆもあらん

○おきんハ解智あけり讒言を人志れハ討て其身をあら
んとあししむかるを謀るの残悪の志をさしは害する惨
毒かるといえよりたうるところつとましのうまはるしむる
へしと討まするうらうらさけしうそんどもかくあまするをさしむる
害しハ憤意をころりしむるめは惨計よとちひしむる
悪の手後さよ終に業虫またりしめもさしむるをさしむる
いよし毒悪それまをあら後戻の伏線ともんるへくお

養子殺害の
あつたあつた
人のあつた
あつたあつた
あつたあつた
あつたあつた
あつたあつた

志ろーさておましん元よりも淫悪の婦とある多きこと
かの死虎口の燐火より先づ大原は宮をさし一氏大原
を害しこころは又難言のいあれと叔父はひとしき九条を害せ
謀り害し膝を並ぶる二婦を害し次またうしを害せ
るのみうあみだをさへ死地におとし入るまで人命を
塵芥のゆくおのひそにあら虎狼心あるよりあるう那妙
く志ろ此おましんい中編は女としての立敵虎狼は昏
るなれいこの悪計殺伐の自決決するは身をち膝を
なれもこれてなれいあらぬなれとも二婦を一刀に殺せ
おと成家の悪毒あるいまは山奥の補婦あらこそ町人

たつたあつた
あつたあつた
あつたあつた
あつたあつた
あつたあつた
あつたあつた
あつたあつた

の毒の志ろいおましんも淫らよせきいせきうう是又悪
虎の憑るところと見れい難も無からんあつたい子ても合
巻なるを何の理屈をあらううつい悪癖はれは家から一
笑し猫の計策前集してそのをいふ知れはこと
よりあるうあ深く妙く此おましんう虎毛を殺せいふは犬は黒
なれと何とやらん氏松は搏虎のおうけもあるやうう北猫
をそへは昏あつたいこころは用あるためまで有なり何あ
ら感心之猫の顔を志ろひよひそらよ強し捨さるる北捨
彼もゆらるんまで後よそく悪報をひ合何のこるうく
おましんい○やう花う疑ひあうういをつくみて何と

後書

もいささるるふ地と云ふ誰そい一人ううううのめあるは
 こりちろんあううやを花よあううおの役とり破十郎り
 九命の母の葬を之惣の不孝憐容を考花ういひみ
 おのり又首のゆも破十郎何れもあをて石碑をさく建る
 忘なく才を花い建て死んころよとむうふなと花惣を振
 いささ河うううと花ころやうまでおのりうう
 ○駿初の中へ
 破十郎ゆりあまるぬくおふけて悔まらるのそこの都合
 例のころやう美父の死をわがまはらうてやつらいら
 ひの思ひをさう一ひの母をいひみさうみあまらんをさうを
 よろこふなと殘忠不孝暗昏不智志う二妻をさうみあうら

五神位牌と
 日東 既七
 埋えりもあう
 列立りあう
 又さうわう
 ↓

これらも何一くあげゆと何様とせーあのみこし孫忠不孝に
 論はおまをま此為情も又あまへーうまのらお知いさめよ
 一をまをさうまでさう何のぬけをーさうかろもハ親と何一く
 ゆひあうけの夫を死せー免ー罪あれハ非業よ死をへきと
 ちろんこまきのハ何ホの罪もさーかのためーととろともよ
 意みひらゆをいひあをさう一主をあのみのおとさうて妬忌争
 花よりあうりまで二人あうら福を招きーさうもあるへきな
 れとおまらんあまよ死ーさうハ憐あーとともいあさうさこれハ
 こまはあまを親ハ世をさうさうとハあれとゆーくハ何そ娘は又
 然るゆはひ合あうてさうのうたのよ頼おのるあ伏線も

たくみこころもさるるを奪ひしる親子はれに
捨ぬさるのこもらばほまち令のあるをみち又薬店を
も吞まんとて此邦謀をさせるあはれそのり文面よそ
あはれならぬと後辰を令せりしてあそらくこそさも
阿つて成へり○かめ子うぬ潮よともあされ来りたるは
いちよひこころらん来らるるはこころあはれをわめくと
束まると元より浮屠のうめ子あまはれ時よ思あを捨
て又砂子とあめこころよ束まると成へりかくて砂子と
秘計をうけてむこころも思あをさうりたるおまへはとよ
あはれとも思思いあつも論よあよそに報の結果を後辰

精進書き

細詳

よ志るらん妙潮秘計をかめ子よつてある使役をあつて
されとこれらもこころいうあはれもても此妙潮おまへと
いひかめ子といひ邦謀を嫌むるのみあはれ思をたせけ
て二度までそのまを言せしむるその外邦怨あま事
よしくむへきの思思に阿つまのこころ有なれこれ必五紋次
う事案の沖んある入き之髪をせしはまられまの尼
よてあるはよら事ともいふあまはれ思邦なる其性いよ
かくのあはれおのまら昔はこころもせば人妻をそのり罪よ
罪をかきぬるやらんこころも結果もさそりこころも今よりま
くかんこころもこころも○思あをさるるの邦計いよくあ

精進書き
甘んば
神中老松
匠の元

百歩り
あらむ
あるが
あるが

るかくのさうりなれいあは秋奇とひもあらんこと
おのさめいみいめらんよよくばまのて面白
といふあし鬼あ那謀はをうられてい美の罪は竹台下
は宛はふるうれ籠子をゆるさし條をえるよさあて
いさつをとしてそのうらふるもあはひいんを
いよういりあのかういさむをいめたしうそそのま
めは名はあはあを由入衆くのあはうりあつてその
うはあはひうらういあつめとあはうら湯こも流
うけぬは魚心あたふてあはゆりのをいひみんは但
かあまかいこよていあらんかひひのあまてあはまて

いさぬある女さるをさ女ういをとてるをもさため
あはとさる人妾を奪のまをさし斬夫正人よせさる
とさるめらんこ志うれとも豊あはらほよていあ
まへ英人志らも助を抱きて懐は入るをいさうけさる
まは三種の茶もあひあひあて地徳をさあ
らび人のあまうてさあはんよ是又正人よあははしてさ
貴買の人たうの地場は及かな有かんうされい豊あ死
いさよ是様むいともいんあはんとるをいさは
あらんちよ入るの天理をいさはれさるをいさは
のまはひいさあて春まはひの徳をいさはせら

れし豊れりさせるともつちよたまはけていひえるめく
させる罪悪のあはせとてとも色と怨とよ送ひふくふ正
の女を妻とててふ正の賊ふ正は富みふ正の業物は正
の利をもうるまてふ正の志はまよふ大害を招きていふ
まあめていさましめあひあひつとむむい○申あひ
獄よ死し手代お志は皆うちをあらかめよのこ罪を
家花雜物下されしもの明びは皆からくりよよの
文面改はゆ白たれい今更よいあをま鳴呼おそる
○啓十の籠子を皆うちをうらむると人妻をあのれ
奪ひてそ女の又あはれを怨むは程なきるやなれとも

標

既よ花物とてハ此惣も又こと早のりなれいこれか
も志つへきなれと心きたあ捨ぬぬのみらあるもいるを
を吞んだめよせんかあるいきはひむんせてかれを依する邪
まの志はあまの有るまをいして籠子のをとされてその
物よあちいるよその人言よめてくれを又一の側室とて
籠いする志も情もあはこそ口の色と怨のみある啓十
淫悪をよしめかしく控いさるめあはも眉をいし
られいるうか○志みはり教は統教をあてさいあみ
いもかめより為情をぬまるとは同じくいさる自らい
の志はあはれむららさいあはれいことらつなれいあはれ

又巧也

つるハ條の殘惡志^らしてその極弊^りの加^ひも^なくも^ろくも^おま^い
んよ^うう^られてそのま^ま、^奥入^るる^なと^志れ^めの^情態^を
見る^如く^おま^いん^ら一^わく^又つ^よま^い惡^婦の^志が^とみ^も
又^見る^如く^おま^いん^ら一^わく^又つ^よま^い惡^婦の^志が^とみ^も
かの^妖虫^とい^ふに^たう^とこれ^も又^おま^いん^ら一^わく^又つ^よま^い
尊^とい^ひん^らむ^るつ^らの^妙なる^とち^らん^に號^殺を^志
よ^いへ^る習^中の^殊惡^慘毒^の道^具の^みあ^らう^てこれ^よて^艶
麗^なせ^しゆ^るお^まい^んの^再び^此を^怪を^くう^れを^さら^うて^卓
頭^をに^殺す^のむ^よつ^らひ^あそれ^ら死^活を^何も^おの^まぬ
惡^淫婦^の殊^惡慘^毒を^んま^るの^道具^のみ^あら^うて^{これ}よ^て艶

見おれ

猪評寺
兼送新
伯仲と日

見おれ

へ^一○^おま^いん^罪を^復せん^とて^允可^を招^きて^咒法^をお
ま^いん^ら一^わく^又つ^よま^い惡^婦の^志が^とみ^も
て^後又^何と^う繕^るの^極深^のう^らも^ある^ある^へさ^らう
允^可の^詔を^介して^{ある}へ^一○^咒法^奇驗^{あり}て^習中^一
お^まい^んら^一部^をよ^まら^うて^おま^いん^ら一^わく^又つ^よま^い
縁^をつ^くる^よ習^中も^流る^よお^まい^んら^一部^をよ^まら^うて^おま^いん^ら一^わく^又つ^よま^い
お^のま^いん^ら一^わく^又つ^よま^い惡^婦の^志が^とみ^も
取^柄は^なら^ずも^おま^いん^ら一^わく^又つ^よま^い惡^婦の^志が^とみ^も
い^ひあ^らう^九部^をよ^まら^うて^おま^いん^ら一^わく^又つ^よま^い
て^この^よう^につ^くる^なと^おま^いん^ら一^わく^又つ^よま^い惡^婦の^志が^とみ^も

好語

○啓する音響あるは二るをさあまはあへいしる余
 るとわかく合されともあまはあへいしる余
 啓すよりしめしめ又うのまめをを御は殺
 せしむあともて何となくあまはあへいしる余
 ほひあつされいかのよをゆは誰よりも先うれを候て
 そのころをともんとてなれは浮き金といひうしめつて
 外候をうしめしるもあへいしる余をよのしめあへい
 固果志報のかまするをなれは冤魂暗はまつをうたて
 志らせさせしるもあへいしる余をよのしめあへい
 よもあへいしるもあへいしる余をよのしめあへい

理評

あちこのちのをもを歴するはいうなまは固果の志うをむ
 るとわかく理外の理をてまめといふ○あみ次り
 あまはあへいしる余をよのしめあへいしる余をよのしめ
 て死ししる余の主のまめは好通の四対はあへいしる余
 ううたあめつてあひもあへいしる余をよのしめあへいしる余
 を川へあつめられはかの猫の対応と既あるて有な
 れはえよりいあも及をもと倒れはひ人の精細さよおこや
 つもあへいしるあまはあへいしる余をよのしめあへいしる余
 寒はかくせめあまはあへいしる余をよのしめあへいしる余
 此所の掃色のもやううてかくあへいしる余をよのしめあへいしる余

多々
五
五
五

五
五
五
五

廿二

○ 御梅をさきんとてせんつ淡路島に依りてのりて
とてい妙くの禮儀あるをよみめてゆくでい誰うこれを御
梅があるのをそと知るへきうへもくも妙く感心成ねる
るまをいひこゝるのぬけぬけいそれよも終これを
かく見まてるのぬけぬけい感心五加肉の此便
する人形敷をつらされさる妙き倒るるなれと先ころは五加肉
の白んせいらふも妙といふへ一宮中御の妹は御梅あるを
よごころそよ何とうかとう依縁のあゝるをいさうと遺憾
のやうなれともこれあこりの腹稿又今孫の形あるそ
のころもさういひしそいともかくもこゝろいさうて何となく

見ゆ

これにて
あつた
へん

廿三

呉服うき世末あはせつちよと御梅をよほをされさるる
これをとら後姉妹これとも文通いありんるさへん
られて同際なるもこゝろ先此依縁あるおのり
○ 帆九郎 皆美長子よしてあれとさきていま、御梅の
世に實父のあは居るがとの教令の妙くさうとてい自生草
感心之形十粒成ねを何やふて入る十日大うは船籠ら
まきそをぬきこゝる居るらふさもあるへくそれやうて御梅を
そのころそのつらまもあるおのり
○ 藤おの
備人さくと幕方うを評せられさる娘めいらん人れこの保
のほお心おのり
○ 五加肉の猿を動かさる計策を

あつた
口本
又
さ

細評

従くとい何のためとも誰か知らん意外の奇策妙く
 お條猫との対いもろろ人ふろしきとも對して又つ
 むとひびくのたうひも妙く使お侍といふ思つは志らも
 轉くつらまれらるる小屏凡の七字母のろろ宋素
 綿とせられらるるやう
 ○五加肉の主をあまむく
 の邪悪のみあまむくお川を縁るの修毒なと罪悪かくの
 如くの悪奴まう平ととも武松の草さの二稔よ
 て下おひは結果せらるる草ともいふくくあ
 ぬくちもあつ○やを義と松介をこころかつけまのけ
 くるらふかくあるく志らも又松介いさくおく大を義

宋素の
り列す
とらとせ
中あま

五加肉

武松の
草さの
二稔よ

尺取老

八回おせきいさめてせうれは是非なく淫邪のむらも
 交りてあるべきをまうれらるる家あま清いよ清
 あるの自分の幸ともいふべきあらん○武松の鬼を救
 ひたあやる毛室を撮合のりなとの有あらん但し
 一夜お清よ既よそのるあるなれに又一轉しての奇案
 あるくめろろ人口画の澳流娘それあるの事成へ
 ○武松を自殺せんとするを志お告つはあらういさめ
 とく免て砂千うらむを先つくやこいひきたたのみ的一件
 をものうらむはあまらぬ日あるゆへに夜ねそこよ
 とく死せんとし恩義のためは命はうけてとらけひく

尺取老
中あ

なほと段取のおのろきいとちろんすて水滸との叙のうへ
 られやう妙く美し物ありろー陸本小巻のきくちと林沖
 をとりあをさしける妙叙もつとも奇妙之筆天柱をも
 まへられー是も又さるるよへ申して此條中傳の水滸
 のうへさるるまのいさへけいせいの解を解きさるるやう皆うへ
 られるその事かのもつれもとり合奇く妙くうへま
 も感心之帆四歸一人を跡さしける此の叙つてもいと
 もんく跡をのちへまよへしへ跡るるさされ茂松と
 西父の難言たむまじい何とあるいつともあるあうら
 跡未何ともまかされぬ種をのこへて次跡へおくるのむ

評
 妙

まひいらさるる妙あるう那ー

右どの條の評中よりつめても合巻といふらとまれの又次
 條よりあつた條の者を論へてあつた後そらとま
 家あつたといふもあつたもよしてそのいささるるもつま
 り皆條の理窟を説きあへてあつたよむつても終回癖を
 いうせんまうーさうら合巻をとりあつたをいささるるよ
 をやまらうらうら中跡をあつたあつたあつたあつた
 うつて罪うらうらうらあつたあつたあつたあつたあつた
 りなれい不當いもちろんあつたあつたあつたあつたあつた

よもよろしくしゆねあふ春書の手筆倦たまふらんをうあ
よ只一時のしゆねあふ春書を新ひきふらふらん

戊戌如月

竹篠高倫

らみ作かそ風もよ^と黙^と浮^とり^と且其詳る^と根ま^とた^とり^とあ^と
字^とに^と感^と心^との^とゆ^とま^とき^とあ^とふ^とみ^とそ^と合^と意^との^と思^とふ^とよ^とそ^と作^と其^と
信^と微^とる^とよ^とふ^とあ^とけ^と竹^と五^と浪^と出^と流^とあり^とれ^とん^と浮^と其^との^とあ^とれ^と
見^と易^とく^と詳^と一^とか^とそ^とあ^とふ^とあ^とつ^とし^とあ^と詳^とい^とて^とま^とれ^とた^とれ^と合^と意^と
こ^とう^とあ^とれ^と中^と出^と流^との^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^と
あ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^と

浮せしむるのしゆねあふ春書の手筆倦たまふらんをうあ
因^とに^との^と浮^とあ^とれ^と其^との^と世^と界^とを^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^と

卓^とニ^とカ^とア^とラ^とセ^とル^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^と
精^と粗^とと^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^と

卓^とニ^とカ^とア^とラ^とセ^とル^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^と
卓^とニ^とカ^とア^とラ^とセ^とル^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^と

卓^とニ^とカ^とア^とラ^とセ^とル^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^と
卓^とニ^とカ^とア^とラ^とセ^とル^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^と

卓^とニ^とカ^とア^とラ^とセ^とル^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^と
卓^とニ^とカ^とア^とラ^とセ^とル^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^とあ^とら^とふ^と

不接しそねまもくろくす飢を凌ぐ已く食分を思ふ施し
其七親のあしとらるをたけりるあつた徳心陽なつく久屋を
孝よ良良の人の妻よりるきひあへしとらるをの事ニ力なる事ありて
日守甲の故すよの事までれて懐かしくは母憐れさるる死を
か庫と争ふも他々幕屋を君めあそ後む枝れよ至れまを
かゆり盡天はの悪者あへくとも懐かまれりか事よよ所云人を
殺く物よあしと具せとらふとゆかこや於て押原にむかひまの故て
馬のうまをとれともあがこせの悪うたゆくるも大悪人ははてま
飛せぬともあつ共十二悪人きゆるとらるを佐若れをを戒人とて

この御事を他山も承か金瓶梅も大同一々於再思
あれりともものい

東木の枝れし物徳これと用とまらるて徳かああらひ洋中
再持の條累まよ徳たひ細答分解と及ひまを
又流はまきまきたらる宿所も小屏凡のきま宋素卿のて同
せしよまきまわくまきまの所一
宋素卿の明人こそ足利將軍の世の中
用かれ事と事りてこころまきまらあ度素卿足利の
使と明同あつらひ初明やう前妻よこまや二子被ま
存りぬこころま再合して別を惜み父子の哀情をあらうとて

これのうら明勅をよみて遠く奉御ハ殊致されし事ハ御
家様兼放お軍の傍中と見えたり寛政中七五全塔の瞿
麥ト致とも致す

これらのおのふり奉御のみみかかるといふこと
とふり奉りてこそ奉御ハ奉性には有るを和漢の両書あり
この改刑死をれり致す奉り奉り奉り奉り奉り奉り奉り
致す限の心奉り奉り奉り奉り奉り奉り奉り奉り奉り
奉り奉り奉り奉り奉り奉り奉り奉り奉り奉り奉り奉り
寛政夏六月廿五日
書作客上老先

新編金瓶梅五編

黙菴拙批評

け今金瓶梅ハ実小よく作らるる物也禪史小して見
白不しきなり草双紙にて見るハ情しき振あり此双
紙の裏を中たる大原見方文と成との名を付しき
今の世と虚文の人ハ多く実効あり文弱不陥り遂不
い者俊小なるなり武名通の人の野あるもの野あるも
仙貝樓の和ありて驕奢者ハ流れさるあり故ふそふら
の勸懲心考へて又次々情武具名物の名をおいせし
相毎篇皆妙あること也此五編ハわけて面白しお蓮ら

好評

後漢書と
日宗

奸計みて九四郎を倒す不妙あり、殊ふ太の猫と虎
紋のよりくるおあて啓十布との断通をなすきたる最
緊要のおあり、夫を以て九四郎をさかり教をむよ
但し此猫もけけあてい海ともしりる、骸い水お流され
ても罷い何うお馮心纏て、又何その妖をさうんおおたじ
力難うるもの、事皆是婦婦の後あて良善人おそれば
此命お終るも、そをさす、啓十布う再び籠子を誘ひ出
し、妻水を慾心心の臨おいり、奸悪の至極せし、そ人を
るうやくなり、お蓮う奸智い啓十布の又一名を執り
笑言い、そをさふあつ、そ主の妾と合せし、そ罪を

ひんて
まをふ
をさ

ひんて
まをふ
をさ

死の如く通いなりれども、お蓮う毒汁おまき、故格
別むざんお振あり、お模し、由那候が、じり慾心おまのひて、お
とて、そあ、お後い啓十布を、漢路へよぶ、お、そも亦已
う奸智お服く、て、啓十布を、同えの者とおのひて、返て
是、不欺れ、十分の徳を、ゆま、し、う、じり、最、あ、の、娘、さ、へ
と、ま、て、ま、さ、さ、こ、ら、び、そ、僕、入、可、肉、が、ま、を、欺、て、こ、じ、り、ま、人
の、息、女、を、他、人、お、與、え、し、お、ま、が、娘、の、罪、梅、が、そ、う、又、そ、う、又
を、棄、て、お、い、ま、お、と、もの、あ、て、奔、り、し、啓、十、布、が、呪、族、の、又
ある、婦、を、盗、め、る、皆、是、獅、子、心、中、の、鬼、あり、し、様、を、ゆ、て
より、辨、く、の、奸、計、を、思、ひ、付、所、お、奇、之、武、松、う、漢、道、お、あ、は、

依例也

より書を放つ是が龍文城におる伏線とあり且ハ音使
ハ和漢例あるもあて放ばしむ杯の類をよくあられ
るよ只むと通し小讀見ていこらに伏線ハなき振あり
漢へあくる故書を放つ又小曾て漢又の向ふ兄の款を
えぬざる送城をおこさせ既く自滅と云ふ所の処へ志^紅を
婦才小とめられてとても死せる命あるハ恩義の爲小
志^紅を助人とあふ前及理始終よく闘^紅りこり此後
心の自滅の件あくては志^紅を小たれざる事あて活二
正^紅と出をてい只おさき志^紅の二匹又の向ふ小なるなるやと放ま
し海^紅の流人ふて再び生^紅海^紅小款小を人るかき場

母洋
至言至言

如洋
的矣

如洋
知事
如洋

小むりて他人の爲ふ力をあそふ一つも按月あく孝義の
忠節の志をよく書れこり他作^紅の^紅一^紅とて助^紅に
べう^紅の相活二とのおをこり酒店を取らす所は是へ
水滸傳の蔣門神と武松のおをこを換骨奪胎あくも
書れこり志^紅も水滸の武松が所初ハ皆已より仕^紅也
喧^紅喚^紅也^紅破^紅云^紅蔣^紅門^紅神^紅と^紅武^紅松^紅も^紅悪^紅人^紅も^紅せ^紅よ^紅武^紅松^紅が^紅酒^紅小^紅碎^紅て
酒店を聞かせ又こり蔣門神を亦例して方根人今の世の
神^紅ぞ^紅れ^紅去^紅の^紅こ^紅と^紅ま^紅に^紅て^紅い^紅然^紅る^紅氏^紅活^紅二^紅と^紅こ^紅り^紅測^紅お^紅不^紅
こ^紅り^紅て^紅お^紅を^紅よ^紅ひ^紅あ^紅れ^紅よ^紅り^紅武^紅松^紅も^紅あ^紅る^紅武^紅松^紅も^紅名^紅初^紅
よりあるに非ぶま^紅こ^紅り^紅を^紅捕^紅る^紅者^紅不^紅譲^紅人^紅と

源氏物語

いひしも利令令太がほよりあまふして武松が束て奪ふ
心あふに約束の上ふて武松がゆるるる理を極せり然
るをそ妻中子の狩も非ふつので武松がふおき結せ
らまてこの事一つとして理義ふけむ武松が義を
いひ猪義をいひゆるるふらに換骨といふあがら
も水滸のいごんういもあふんれとあひる人相違ふを
燈より横濱がふ僕をして武松を極せんと謀り
水滸の山神廟の傍にて又より飛雲浦を去る樓の
傍あふ水滸の林冲武松あとい事を束てせりゆも
あり又ハ五晝の婦女子あどを執するもあつて愉快

精

似これとも中ふいあまの惨毒ふとるれとあふ事あきふ
非ふささしてハ勸懲の意うそかり酒の儀之ハ専ら勸懲
ふ在て地壇ふ金の件より横濱らるる所を人も
晝の志を教さば理義分明あてんるもむよハ向海帆
九晝をそ人を極めりたまとも是う又何ぞの極深お
らんれ今よりさへ人を極めり定る就文仍の件ハ
新奇妙業最多の事ハ但り地壇をやしハ事の治り
い志を告父子姉弟ふかして難事の場合あるべく誰うを
武松が身替りふ首をさるるぞ云云向もあふ人れ最初
ふ可肉々計ふをひハ猿ハ最早あま切あて流り

あつた
あつた
あつた

物文のハ様ハ付き物也何ぞ流るべきの所ハ小むつこ子細
あるべきハ相亦猫を川へ流し笑者を川へ流して流し
葉に志すまども流の末ハ海へ帰るる由ハ是等の物も
物文へ到りて何とらいつハ流るるへきハ少者ハ拙業
にハ仍屋き籠りれとも考るる不と早く先んたき物
なり作の者宿も居る人と思ふなり

題新編金瓶梅之後

黙老山樵稿

盛原
日吟

發敗新篇稗史魁
繪書聯翩紙中開
典、雅愛玩宵談柄
婦幼歡看午膳媒
精描景致十奇輯
細述形容衆妙該
泉家移得搖錢樹
金氣舉光瓶裏梅

禰急他心一第のりん

此語別を希は

著作堂藏

Blank page with vertical lines and faint bleed-through text from the reverse side.

三の腹係
解之

厚
口

金瓶梅道評お蓮う三婦をさうり教すそふ最妙留まこと
も先か侍藤い己う身物もの名懸およりしてそまらるへき人
も又父さる新所も皆ばいあお死したまへ此命小終りを二死
しに論あり又卓二も己う世をあらそふ恨のしめお
人のぬれをあらきて美者にやきぐらひをさへ^{あはせ}あはせまへ
是亦陰毒の被ひおしとまへらひ力時も良善の人には
りれとも此命のお伴おするいそ入るの向偏お蓮の心は
い己がぬれを知りし力時ゆへ是れ教さぞい叶い福とも多に
てんらると力時を人う才一のお仕合とんゆらひ如何
扱ふ九は形を教して後お蓮々水むけ小籠して親の款の

枕のうしろ
汗のうしろ
大いさ取
股に甘み
外す

とげより縞の残布の重子の次方前後のあひこんと
まきうて結ぶりとの頭旗あるといふより啓平郎小判深く
も思ひたる保什妙あり地頭旗といふゆゑとぞでいふぬい
あふぬあまのちにてを妙あり

又家小の妙詠向あるはまの啓平郎の尼を嫁にして心
の湖をいづ親子小庭〜〜〜お蓮も祈禱の坊主の助けを
ゆて枕の湖あ〜再び啓平郎の罪をゆ〜〜志うも親子
い枕の祈計を知らす〜〜〜歌〜〜〜啓平郎も亦枕
の湖あて己が湖中ふいま〜〜をふ知彼ハ尼を嫁に
て女子を歌き〜是ハ坊主を殺して胃子を深海強中又

いさな海
汗と内索
又結とよ
氣いさへ

強中のいさありに〜〜〜にいよのありと事とを〜〜〜
妙業実の奇といふ〜〜〜其上緊要のおれ枕少て枕衾
上の情状を嗜ふ含み〜〜〜不可思様の名作あるり
おけ篇中啓平郎小荷擔せ〜者之店念をばハ白備
皆嬢婦邪惡の人而已にて事の邪正虚実を徹
人あ〜〜〜とびと〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と九巴名
啓平郎の事より事〜〜お〜〜あ〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と
後ふ〜〜と善悪心邪正顔つ〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と
んれ但〜〜と物買樸直の人ゆ〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と
を存〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と〜〜と

辨
至
服

巴篇の口繪にこけおが首桶を掛し俵を画きしり
然らば定めて六篇にては茂松の塔木を焼く矢由て
命をとらぬきいふなりて身更なるごと用ゆる場おを
らんれ又つ由なりしこいし婦もまであらざる計りて格別
役あり是に定むるよは篇ふらして一設つけらるる積あり
んれとあや

蕃ののうん八といふ者是とさしての悪人とも亦い若人
とも足利村ども是も好悪の人らと思ひしこ之具故に笑者を
殺して水お流しし信人ふあきをかせしとを理を云ける
時同きあはるにてあはるしり且安水をもくする事あり

の奸計ゆもあつうまうと見えしり

この書評を光株枕の照野乃といふまゝに知事信康に七日の
あうまの所由評あつうは力やる格を絶やれし
只目末のたを推さる偏見無評と相同し又物評を
信評のゆえまゝとれいふも異し
新ゆを露ゆの合是の思あふれいひきしとあはる月ひ
流心とあはるをたれて言ふよのあはる極化をい述作なる
ふまはるあはる評しとあはるあはる相ぬのあはるありて割
然牛刀は異るるゆへにあをあはるまゝとあはる

著作堂藏

いさむかきぬといふもゆかひなほさかひのうらみのとせのこ
今昔やういの方よりあめり及所物は痛厄なり一人は
一人の障りさうまにまふなつていふやこ一かたをみるは老
ちれくす極服をさるるもまふなほさかひのうらみのとせの
ふくまをまふれまをさるるもまふなほさかひのうらみのとせの
別あふつるは随園をらまの最たつてやうなれくすもま
むらりくすもまふなほさかひのうらみのとせの

次出目録の五

著作堂主人

金瓶梅五集

畧評

上套上

序文ハもつら丁なるもよく勸懲をとりしるるの作
 の沙家の事なりとさしてくうまひこと再三執心後感後之
 この自序にいつも趣をくらりおよほぬるまでくわいり
 序文をおろくくれしる作者も古来未嘗有るへ
 如文のみをめて、序文おといあるさうよみる人のあ
 る人をあききて先筆ついでる感心のよきをあま
 せざる猫の趣向いあることありとていふ
 うりもいあるくうけあんとおぼゆることありとていふ

此評

見り

さるごとくしてうる業外の趣向あふんといお蓮「奸悪をふくむへくあ人の妻をひひ」ふふいふられいふもいふとして妙あるふくは親のくさきいふきあるれとわく夫の親をれいふは悪婦ありとてみつうふいふをいふては懲悪うとかり作者を苦心の場あるへよくもその難をのうれてまある人の妻をううけられも一事ある合巻ふいをい一大趣向物をい

見り

破千部うあるへりも事自然のことくしてより在宿しては前後の奸計がわりありうらぬうぬ妙事を破破部う現は父の死をいともいへてあ人の妻を死をいとをいむげ一言よく破千部の人とあつてぬらり

見り

瓶子う破千部にあて後悔のさまも元来前探あり婦人の情態をよくうれううて破破部は何ことをもいふてそのまあるも意味ありい水々強款よりてうまういふるは世上もいあふきいともいともあひてあ

上巻下

上のまきにては看皮もうりといふていふある趣向あんとあひい下巻初てしてうまういふるは世上もいあふきいともいともあひてあめとあふて破破部う奸悪ことうよくいへ又破又ハ

ともいひしちの二合よてうましくをまのししくとら瓶子
 の淫婦の情態をもよゆうつて一筆あま全に
 瓶子をうましく一杯くはせてひきとて後破千帛うま
 ち擲するとも志ぶとくだいとよ妙劇おげて
 うらととも又妙劇の情態をよゆうつてえいり
 笑二うせのあまをお連うやうそふきてあまうやある
 もいとふく〜こふて艶書の火中へ入るゝ作者の苦
 心あ〜ん〜とめてい〜
 瓶子をうま〜と〜金子いらすむるとも破千帛う人物
 むら〜〜と〜妙〜

めらら法沙に祈禱をさせ又もお連をのこ〜と〜世
 られ〜も又甚しくむ〜妙の妙〜それより〜て又お
 連の悪事を〜くみて笑二をすうすもいとふ〜これ悪
 人の情態を〜わらふあ〜あれい始をわすれて〜ちま
 悪を〜〜つる者之世上の人情をよくうらちえ〜り
 下巻上

笑二うあ〜へていお連の悪事あ〜も〜名はあれいた
 ちまちお片付られ〜もよ〜二人の妾を害〜れ〜よくそ
 の悪事の混〜ゆ〜戻えいとぶ〜〜妙〜て妙〜
 丑梅と奸通の辰これまで淫奔といこと〜して一轉の題

向いとあつらひし猿の趣向甚あま外して妙の妙ありこれ
 らいともくあま外して一大趣向あり下女のつらひく
 一事あま外して猿の足跡をうりまては喰ふも下女
 傍に死ししもていとおくゆきくま妖怪のこと
 こつらもぬらぬあまの妙趣向コニテ西人ノモノヲウマクスカミ
 テラトト啓十郎カイフ段モ自
 然ノコトニ啓十郎帰国ノウヘ又コノ兩人ニ野梅ノヲウ何トカイツハル
 7アルヘシカリナリテ野梅ヲウレカハルニ便利アリカレベシヤ苦心感後

下巻下

巻のことよりして武松の啓十郎のこととせしむるもよ
 ろあつらひし猿の趣向甚あま外して妙の妙ありこれ
 らいともくあま外して一大趣向あり下女のつらひく
 一事あま外して猿の足跡をうりまては喰ふも下女
 傍に死ししもていとおくゆきくま妖怪のこと

好評

まじり
 おう
 伏線
 下巻
 先
 あ
 し
 ま
 る
 角
 力
 の
 場
 よ
 り
 一
 件
 の
 水
 滸
 の
 落
 神
 の
 こ
 と
 小
 子
 合
 せ
 ら
 れ
 る
 一
 段
 の
 趣
 向
 有
 る
 へ
 く
 又

又いふまじりこのこと若しあるべきあつらひし猿の
 いときばしきりまじりことよあつらひし猿の
 さあて猿入用あるへこの巻のおまりの悪人み
 こつらひし猿の趣向甚あま外して妙の妙ありこれ
 らいともくあま外して一大趣向あり下女のつらひく
 一事あま外して猿の足跡をうりまては喰ふも下女
 傍に死ししもていとおくゆきくま妖怪のこと

柴歌を「林沖」のことをよく一読しられて力ありつゝ
あつて「木」作つきはるやうあつて人を五人よくをあら
くするすくもおのうら
悪人みまごころの辰いと愉快までおのうらさ
と後回をえん文してのみううは評ううられの筆を
まうとあつて

又帳上下四冊をいめより終までいさうもあつて
矢あつてさつてくおのうらきこと空易の筆うら
ううううううと評ありともと終られ友成の
評をうめかきう実の赤面くむううう物先生

至正
三
物

の沙著作の妙は合美色一丁ごとく画をういて
さへ中文をよまぬわううううの始猫う辰
はうねて釣うね店友の速画をみうう評趣向
ハ察うううのキ是ハ画組も沙苦心あるから
の事あるへいまこと感彼一うもせし
う一笑

桂窓

著作堂先生

あはれはさきなりあはれはなれはうらなふをこそとて所を合をすべし
思致はちうなりのなれはうらなふをこそとて所を合をすべし
あはれはさきなりあはれはなれはうらなふをこそとて所を合をすべし
あはれはさきなりあはれはなれはうらなふをこそとて所を合をすべし

戊戌夏六月念六 著作堂

[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]

